博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	近藤　一成
論　文　題　目	宋代中國科擧社會の研究

審査要旨

本論文は、唐宋変革をへて五代・宋にかけて大きく変容した中国社会を、二十世紀初頭の辛亥革命までつづく伝統王朝約一千年間の体制再生産構造を備えた社会の出現としてとらえ、士ー庶という中国史に一貫する支配ー被支配観念を手がかりに、その特質を検証したものである。具体的には、王朝の体制再生産の鍵としての科挙に着目し、宋代における科挙社会・科挙文化の形成と展開を三部にわたって検討する。

Ⅰ部　国制篇「宋代の科挙学校制度と文人官僚」では、主に北宋中央政府の科挙政策と改革を考察し、范仲淹や王安石らの改革を継承し、一般には姦臣として悪評高い蔡京の科挙学校政策がそれらの集大成であり、結局失敗はしたが、以降の科挙社会定着の契機となったことを論証する。

第一章「宋初の国子監・太学について」は、漢以来の太学が内実を変えて宋仁宗朝の国子監に出現する経過を追い、その背景として庶人からの学生選抜が主流になり、解額が太学にも与えられたこと、進士の地域差などを指摘する。第二章「「慶暦の治」小考」は、こうした科挙・学校制度の改革に連動して、士大夫が歴史上に顕現する慶暦年間を対象とする士大夫政治と彼らの政治改革を検討する。第三章「王安石の科挙改革をめぐって」は、史上知られる王安石の改革を再検討して、宋代科挙の中国史上の特質を論じ、その改革が宋学の展開などにも連動するものであることを明らかにする。第四章「蔡京の科挙・学校政策」は、本論文の中心をなし、彼を王安石の科挙・学校構想を形の上で実現した人物として評価する。養士・取士の一致をめざして彼が実施した「天下三舎法」は、わずか十数年で失敗するが、この改革が地域エリート層としての「士」の輩出をもたらしたことを検証する。第五章「南宋初期の王安石評価について」は、南宋を旧法党系価値観の時代とする通説に対し、王安石の学問を学んだ高宗朝期の実務派官僚の存在に光を当てる。第六章「「紹興十八年同年小録」三題」は、朱熹登第の登科録である同年小録にもとづき、この科挙をめぐる実態を分析する。

Ⅱ部　地域篇「宋代明州慶元府の士人社会を中心に」では、中央の科挙政策に対応する地方の動きを地域士人社会の形成の問題として、史料条件が比較的恵まれている明州を中心に考察する。

第一章「南宋地域社会の科挙と儒学ー明州慶元府の場合ー」は、王応麟と黄震の事例を比較材料として、唐末五代、北宋滅亡と華北の戦乱を逃れ、多くの移住者が流入した新興開発地域としての明州及びその士人社会の形成過程を検討する。第二章「鄞県知事王安石と明州士人社会」は、明州「慶暦五先生」像が南宋後半期に盛時を迎えた明州士人社会によって自らの来歴を説明するために紡ぎ出された歴史像であることを、史料批判を通じて明らかにする。第三章「宋末元初湖州呉興の士人社会」は、明州とは対称的に進士数の推移が漸減するタイプの湖州の背景を検討し、そこに新興開発地の明州とは異なる成熟した士人社会の雰囲気を見出す。第四章「王安石撰墓誌を読むー地域、人脈、党争ー」は、王安石撰墓誌から窺える北宋士人の地域帰属意識、人間関係と党派意識について考察し、また本来なら墓中に埋められて人に見られることのない墓誌銘が、士大夫の作品として流布するところに、宋代士大夫社会の一面を提示する。第五章「南宋四川の類省試からみた地域の問題」は、類省試という臨時的措置が四川のみ継続して行われたことを検討し、科挙社会の地域性を考察する。第六章「宋代の士大夫と社会ー黄榦における礼の世界と判語の世界ー」は、宋代士人の事例研究として朱子の高弟の黄榦を取り上げ、朱子学の社会的地位の確立、士大夫における理念と現実などを検討する。

Ⅲ部　個人篇「文人官僚蘇東坡」は、唐宋八大家の筆頭でもある蘇軾を、科挙によって出現した士大夫官僚の代表として、彼に関係する科挙文化の諸様相を多面的に考察する。

第一章「東坡応挙考」は、成都眉州を本貫とする蘇軾の一次試験が、実は開封府の寄応取解であったことを明らかにし、高官の推薦・保証など科挙における人間関係ネットワークの側面を析出する。第二章「張方平「文安先生墓表」と辨姦論」は、前章の行論にもかかわるが、偽作説のあった張方平「蘇洵墓表」が蘇洵、軾・轍父子の伝記資料として有効であることを検証する。第三章「東坡の犯罪ー『烏台詩案』の基礎的考察ー」は、蘇軾が朝政誹謗の詩を作った廉で獄に繋がれた事件に関する一次史料「烏台詩案」を検討し、文学と政治が交錯する詩案を通して、北宋士大夫政治の特質を考察する。第四章「東坡「黄州寒食詩巻」と宋代士大夫」は、詩案で流放された黄州での作品を検討し、士

氏名　近藤一成

大夫文化とは何かを考察する。第五章「知杭州蘇軾の治績－宋代文人官僚政策考－」は、蘇軾の上奏文を主たる基礎史料として、上篇では救荒策、下篇では対高麗策を分析する。とくに後者において福建海商集団の活動に注目し、宋人海商が高麗と連係しながら両国の外交政策まで影響を与えていたことを指摘する。第六章「西園雅集考－宋代文人伝説の誕生－」は、中国美術史上有名な「西園雅集」の図と記を検討し、それを通じて徽宗朝の蘇東坡弾圧に関する文献史料の記述の在り方を批判する。

本論文は、唐代まで固定的実態的区分の傾向が強かった士－庶の別が、その弁別の規準を科挙におくことによって社会が流動化し、科挙にかかわることが士の階層に属する条件となった社会を“科挙社会”と定義し、この視座から近世中国史研究に新局面を拓いたものである。近年の宋代史研究は研究分野と課題が細分化され、具体的で精緻な研究が量産される一方、時代の枠組みや通史的観点からそれらをどのように位置づけ、あるいは時代像をいかに結ぶか、こうした問いかけ自体が困難になっている。このような研究状況にあって、本論文は士人社会という近世中国史固有の存在の形成と展開を検証することにより、10 世紀から 13 世紀の中国史像に明確な輪郭を与え、同時に現代中国の政治と社会を理解する上にも多くの示唆を与えている。よって博士（文学）の学位に値すると評価される。

公開審査会開催日	２００８年１２月１３日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏　名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院　教授	博士（文学）早稲田大学	工藤　元男
審査委員	早稲田大学文学学術院　教授	博士（文学）早稲田大学	土田健次郎
審査委員	早稲田大学文学学術院　教授	博士（文学）早稲田大学	古屋　昭弘
審査委員			
審査委員			